主日礼拝説教 「勇気の理由」

日本基督教団石神井教会　2019年1月27日

【旧約聖書日課】ハガイ書　2章1～9節

ダレイオス王の第二年、1七月二十一日に、主の言葉が、預言者ハガイを通して臨んだ。
2「ユダの総督シャルティエルの子ゼルバベルと大祭司ヨツァダクの子ヨシュア、および
民の残りの者に告げなさい。
3 お前たち、残った者のうち、誰が、昔の栄光のときのこの神殿を見たか。
今、お前たちが見ている様は何か。目に映るのは無に等しいものではないか。
4 今こそ、ゼルバベルよ、勇気を出せと、主は言われる。
大祭司ヨツァダクの子ヨシュアよ、勇気を出せ。
国の民は皆、勇気を出せ、と主は言われる。
働け、わたしはお前たちと共にいると、万軍の主は言われる。
5 ここに、お前たちがエジプトを出たとき、わたしがお前たちと結んだ契約がある。
わたしの霊はお前たちの中にとどまっている。恐れてはならない。
6 まことに、万軍の主はこう言われる。
わたしは、間もなくもう一度、天と地を、海と陸地を揺り動かす。
7 諸国の民をことごとく揺り動かし、諸国のすべての民の財宝をもたらし
この神殿を栄光で満たす、と万軍の主は言われる。
8 銀はわたしのもの、金もわたしのものと、万軍の主は言われる。
9 この新しい神殿の栄光は昔の神殿にまさると、万軍の主は言われる。
この場所にわたしは平和を与える」と、万軍の主は言われる。

【使徒書日課】コリントの信徒への手紙二　6章14節～7章1節

614あなたがたは、信仰のない人々と一緒に不釣り合いな軛につながれてはなりません。
正義と不法とにどんなかかわりがありますか。光と闇とに何のつながりがありますか。15
キリストとベリアルにどんな調和がありますか。信仰と不信仰に何の関係がありますか。
16神の神殿と偶像にどんな一致がありますか。わたしたちは生ける神の神殿なのです。神
がこう言われているとおりです。
「『わたしは彼らの間に住み、巡り歩く。
そして、彼らの神となり、彼らはわたしの民となる。
17 だから、あの者どもの中から出て行き、遠ざかるように』と主は仰せになる。
『そして、汚れたものに触れるのをやめよ。
そうすれば、わたしはあなたがたを受け入れ、
18 父となり、あなたがたはわたしの息子、娘となる。』
全能の主はこう仰せられる。」
71愛する人たち、わたしたちは、このような約束を受けているのですから、肉と霊のあ
らゆる汚れから自分を清め、神を畏れ、完全に聖なる者となりましょう。

【福音書日課】ルカによる福音書　21章1～9節

1イエスは目を上げて、金持ちたちが賽銭箱に献金を入れるのを見ておられた。2そして、
ある貧しいやもめがレプトン銅貨二枚を入れるのを見て、3言われた。「確かに言っておく
が、この貧しいやもめは、だれよりもたくさん入れた。4あの金持ちたちは皆、有り余る
中から献金したが、この人は、乏しい中から持っている生活費を全部入れたからである。」

5ある人たちが、神殿が見事な石と奉納物で飾られていることを話していると、イエスは
言われた。6「あなたがたはこれらの物に見とれているが、一つの石も崩されずに他の石の
上に残ることのない日が来る。」

7そこで、彼らはイエスに尋ねた。「先生、では、そのことはいつ起こるのですか。また、
そのことが起こるときには、どんな徴があるのですか。」8イエスは言われた。「惑わされ
ないように気をつけなさい。わたしの名を名乗る者が大勢現れ、『わたしがそれだ』とか、
『時が近づいた』とか言うが、ついて行ってはならない。9戦争とか暴動のことを聞いても、
おびえてはならない。こういうことがまず起こるに決まっているが、世の終わりはすぐには
来ないからである。」

「生ける神の神殿」

先週、教会では集会の合間を縫って、一日半の工事を行いました。会堂屋根の上に取り付けられている十字架の根元から雨漏りがする不具合を修繕する工事です。いつからかは分かりませんが、わたしどもが着任してからも台風の大雨など年に一度ほどの頻度で、雨漏りが発生していました。教会においでの皆さんに大きな支障のあるような雨漏りではありませんでしたが、素人では対処できないことでしたので、業者に依頼して工事をしていただきました。

その工事とちょうど並行するようにして、礼拝準備室の奥の戸棚を片付ける作業を、幾人かの役員方がしてくださっています。そこだけでなく、各所の物置や戸棚の整理、片づけを、この一年ほど、少しずつ進めていただいているのです。長年保管されていたと見られる古いものが出てきたりして驚かされていますが、教会の歩んできた歴史を見せていただいているようでもあります。

今日の使徒書（コリントの信徒への手紙二）で、使徒パウロが「**わたしたちは生ける神の神殿なのです**」と言っています。それは、もちろん、わたしたちの一人ひとりが皆、神の霊が宿ってくださる神殿なのだ、ということです。建物のことではありません。わたしたちも、この会堂建物のことを「神殿」と呼ぶ習慣はありません。あるいは「聖堂」とさえ呼びません。そうだとしても、教会の会堂が、信仰者の祈りの表れとして建てられたものであることは、確かです。だからこそ、わたしたちは、会堂を清め整えることを大切にいたします。ここを訪れた者が皆、ここには神が生きてお働きくださっていると、そう思ってもらえるような会堂として維持されるよう、わたしたちは願うのです。そのために必要な工事もし、必要な作業もし、そして何よりも、必要な祈りの営みを、ここで続けるのです。そうすることで、ここが、わたしたちの集まるときはもちろん、そうでないときも、「祈りの家」として知られるならば、幸いなことではないでしょうか。

「だれよりもたくさん入れた」

ところで、福音書日課（ルカ 21 章）は、エルサレムの立派な神殿を見惚れている人たちを前に、主イエスがその神殿の打ち崩される日が来ることをお告げになられたことを伝えています。当時のエルサレム神殿は、ヘロデ大王が大増築工事を続けたおかげで、ずいぶん立派なものだったようですが、このときから四十年も経たずに、ローマ帝国の軍隊によって完全に破壊されてしまいました。

もちろん、すべての人の手で建てられたものは、いつかは崩れ去るときが来るのでしょう。世界には何百年の歴史のある教会堂（聖堂）がいくらでもありますが、それとて、いつかは打ち崩されるときが来るのでしょう。それでも、わたしたちは、信仰の証しとして、古のイスラエルの人々が神殿を建てたように、教会堂を建て、維持するという営みを続けるはずです。

主イエスがあるとき、「**この神殿を壊してみよ、三日で建て直してみせる**」（ヨハネ 2:19）とおっしゃられたことがありました。それは、主イエスがご自身の復活のことをお語りになられた言葉だと説明されています。わたしたちは、ご復活のキリストこそが真の神殿としてわたしたちのただ中においでくださっていると信じています。使徒パウロが「**わたしたちは生ける神の神殿**」と語ったのも、わたしたちが真の神殿であられるご復活のキリストと一つに結ばれていると信じているからです。ですから、わたしたちは、いつも、一つのことを心に留めていなければならないでしょう。復活の主がわたしたちのただ中においでくださるときに、わたしたちの教会の営みを御覧になられて、会堂を御覧になられて、「この教会を、この会堂を、壊してみよ」とおっしゃられることがあるのではないか、ということを。

けれども、主イエスがたとえそのような言葉をもってわたしたちに警告をされることがおありだとしても、わたしたちの営みをすべて否定なさるというわけではないと思います。

今日の福音書日課の前半は、「やもめの献金」として知られる逸話が描かれていました。神殿に礼拝に来た人々は、金持ちも貧しい者も、献金をささげたのです。それは、ユダヤ人が義務として献げていた「十分の一」とは別の、任意の献金だったようです。神殿の増築や修繕のためにかかっていた多額の費用を賄うために、人々に献金が呼びかけられていたのかもしれません。金持ちも貧しい者も、自分の献金がこの立派な神殿のために用いられるだろうと期待しながら、賽銭箱の前に進み出ていたのでしょう。主イエスは、そのことを否定されませんでした。むしろ、一人のまずしいやもめがわずかな献金をしたことを見て、この出来事を心に留めるよう、弟子たちに促したのです。

「**だれよりもたくさん入れた**」。わずかな献金、レプトン銅貨二枚、それは、パンが一つ買えるかどうかという金額です。献金者一覧に名前を記載してもらうことさえないであろう金額です。それでも、それは、このやもめの信仰の証しだったのでしょう。神殿のために、自分の家族の今日のパンを我慢する。それを、あなたがたはしたことがあるのかと、主イエスは問われるのです。

「勇気を出せ」

わたしは、小学生まで自宅近くの小さな教会に通っていました。冬には、まだコークスのストーブを焚いているような教会でした。けれども、日曜学校にはそれなりに子どもたちが集まっていました。その中に、わたしと同年代の元気な女の子がいたことを憶えています。休むことなく日曜学校に来ていましたが、礼拝中のお行儀はあまりよくない女の子でした。その子は、献金を自分の財布に入れて持ってくるのですが、いつも、献金籠が回ってくると、その財布をひっくり返すようにして中身を全部、献金籠の中に入れるのです。あるとき、保育園の先生でもあった日曜学校の先生が、礼拝が終わると皆を前にしてその子のことを咎めて、叱ったことがありました。「お財布の中身を全部献金しても、心を込めて礼拝をしなければ意味がありません」と。

わたしは、そのときのことを、どうしても忘れられません。何か違和感を感じたからです。あのやもめはどうだったのだろう、と思うのです。

「**持っている生活費を全部入れた**」と主イエスに指摘されたあのやもめも、もしかしたら、自分の金入れの袋をひっくり返して、中身を全部賽銭箱にぶちまけるようにしたのではなかったのか。だからこそ、主イエスは彼女が「全部入れた」と言われたのではなかったのか。そのとき、そのやもめがどのような心持ちで献金したのかを、主イエスは問われたのだろうか。そうではないのではないか。

むしろ、金持ちたちのほうが、恭しく献金をささげていたのかもしれません。それを受け取る祭司も、きっと仰々しく受け取ったことでしょう。伝承によれば、多額の献金がされたときには、係の祭司が、献金者と献金額を大きな声で告げたといいます。皆が注目する中で、ますます丁寧に礼拝が行われ、献金がなされたのではないでしょうか。けれども、そのようになされればなされるほど、金持ちたちは、人々の目にさらされていることを気にしなければならなくなっていたかもしれません。

あのやもめは、ほとんどだれにも注目されずに賽銭箱に向かったのです。あまりお行儀のよくない、ぞんざいな態度だったとしても、だれも咎めようともしなかったでしょう。いいえ、見ていても、あえて見ぬふりをされたに違いありません。そうであればなおさら、だれかに見られていることなど、気にする必要はなかったのです。それでもなお、彼女に目を向ける者がありました。主イエスです。いいえ、神の御目です。人々の目に留まらない一人の人に、神は御目を注がれている。主イエスが弟子たちに心留めるよう促されたのは、その神の御目の中に置かれている一人の人の姿だったのではないでしょうか。

わたしたちの礼拝の態度や心持ちは、表もあれば裏もあるものでしょう。献金さえ、裏腹な思いの妥協の結果に過ぎないと思います。それでも、そのような葛藤を抱いた自分を、覆い隠していた物の中からぶちまけてしまえるところ。そこにこそ、神の御目が注がれているのです。人ではない、自分でもない、神が御目に留めてくださるところに、自分をありのまま差し出すことができる。そうしてよい。そこから新しいことが始まると、主はお示しなのです。